

縄文時代集落研究の課題

泉 拓 良

はじめに

「豊かな縄文時代」、「素晴らしい技術を持った縄文時代」、という新しいキャッチフレーズのもと、縄文遺跡の発掘調査が新聞の紙面を賑わすようになったのは、一九七〇年代後半であった。そのキャッチフレーズの意図は、日本文化の基底を弥生文化Ⅱ大陸・半島系の水田稲作文化に求める定説への反乱であり、日本文化の基底に縄文文化を据えようとする発想であった。縄文研究者にとっては、被征服文化扱いであった縄文文化を、「日本史」の本流に乗せるまたとないチャンスになった。現在に至るまで、縄文時代に関する新聞報道の大きな流れは、この延長上にある。学界でも、縄文時代を豊かな定住的狩猟採集文化として定義する事は常識化し、南九州における数多くの発見を踏まえ、定住化の起源が開始期である草創期に遡るかどうかが議論の中心になっている。さらに、青森県三内丸山遺跡のような巨大集落の発見が新聞を賑わし、縄文都市という言葉に苛立ちを覚えなくなる状況すらある。

しかし、そのような一般的な情況下、縄文文化の代表とされる関東・中部地方の縄文前・中期集落について、正反対の見解が進行している。数百の竪穴住居跡からなる巨大環状集落は、同時には一、二基の住居しか存在せず、季節的移动をも含め長い間にわたり頻繁に移動を繰り返した結果に過ぎず、集落の広場や機能分化した規則的構造は疑わしいとする見

解である。「見なおし論」、「横切り集落論」と呼ばれ、一九七五年以降、伝統的「環状集落論」の批判を展開してきた。^①
 レッテルを貼るような批判を慎むべしとしながらも、縄文時代の集落論や社会像・階層性の研究についてのコメントにおいて、職業研究者（書斎派）と職業調査派（現場派）の違いというような区別を行っている。^③

一方、北陸・東海地方以西の地域では、特定の時期、特に後・晩期には集落が竪穴住居以外の住居である平地式住居・掘立柱建物によって構成されているのではないか、また、環状集落は存在しないのではないか、という議論が起こっている。^④しかし、学界全体としては、この様な重要な問題も、環状集落論と「見なおし論」との論争の犠牲となり、全国的議論になっていないのが現状である。^⑤非竪穴住居によって構成される集落と非環状集落については、本稿では後に若干ふれる程度に留めるが、縄文時代の集落研究にとって、より情報の増加が期待できる重要な課題であろう。

さて、「環状集落論」と「見なおし論」・「横切り集落論」との基本的相違点は、集落内で検出された住居跡やその他の関連遺構が同時に存在したかの推定方法にある。この点は、考古学における「同時存在の証明」という基本的な方法の問題と深く関わっている。今までの考古学的年代決定法や自然科学的年代決定法では、縄文集落にある複数の住居跡と、墓地・貯蔵穴・廃棄場等の関連遺構が「考古学的同時期に存在した」事は証明できても、「同時に機能していた」事を具体的に証明することはできないのである。したがって、最も肝心な点が考古学的に曖昧だったのだ。環濠に囲まれた弥生時代の集落や、城壁に囲まれた中国や中東の町邑では、環濠や城壁の作られた年代、改修・改築の行われた年代、放棄された年代を決めることにより、その集落や町邑の年代や規模の変遷を知ることができる。しかし、縄文集落には、集落を囲む施設はなく、厳密には集落の形態すら決められないのである。したがって、縄文集落研究において「同時に存在した遺構から復原される集落」は、一般的には証明不可能なのだ。この点こそが、論争を長引かしている最大の原因である。

二〇〇四・〇五年、立て続けに縄文集落に関する重要な単行本や報告書が出版された。^⑥前述の問題点と深く関わる論考であり、本稿ではこの緒論を取り上げ、研究の現状を示したい。

- ① 土井義夫「『セツルメント・パターン』の再検討」(『史観』二〇、一九八八年、七六—八五頁)や、黒尾和久「縄文時代中期の居住形態」(『歴史評論』四五四、一九八八年、一九—二一、四五頁)

- ② このことに関する研究史は、林謙作「縄紋時代史Ⅱ」(雄山閣、考古選書、二〇〇四年)、末本健「移動としての吹上パターン」(山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・葦崎地内—)、山梨県教育委員会、一九七五年、二三〇—二三六頁)、石井寛「縄文時代における集団移動と地域組織」(『調査研究集録』二、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団、一九七七年、四五—五九頁)

- ③ 黒尾和久「集落論・領域論」(『縄文時代』一五、縄文時代文化研究会、二〇〇四年、二四七—二五二頁)

- ④ 東海地方以西では、縄文後期以降、遺跡や遺物が増加するにもかかわらず、竪穴住居跡が極端に少ない。例えば滋賀県滋賀里遺跡では百数十体以上の人骨が出土しているが、住居跡の発見はない(湖西線調査団「湖西線遺跡調査報告書」一九七六年)。また、晩期の石川県を

一 集落における同時性をめぐって

暦のない時代の考古資料の年代を決定するには、相対年代決定法と放射性炭素年代決定法を用いることが多い^①。縄文時代の年代は、これまで、縄文土器型式による詳細な相対年代と、大まかな時期区分に用いる放射性炭素年代が主流であった。縄文土器型式は世界に冠たる緻密な編年網により、ほぼ日本全域で、地域的誤差が少ない一定の相対年代を与えてくれる。ただし、相対年代であるので、勿論絶対年代を決める事は不可能であるし、型式の年代幅もそれぞれの型式でまちまちである。この点こそが、歴史的事象を正確に知る為には最大の欠点であり、縄文集落を考える上で、最大の問題点と

中心とする地域では、環状木柱列と呼ぶ、半截したクリの巨木を環状に立て廻らせた遺構が数多く検出されているが、竪穴住居跡は未発見である。これらの北陸・東海地方以西の地域では、竪穴住居の代わりに平地住居になると思われる柱穴群が多く発見されている。以下の文献では、関西地方を中心として平地式住居の問題を積極的に取り上げ、住居遺構を集成している。関西縄文文化研究会「関西縄文時代の集落」二〇〇二年。関西縄文文化研究会「関西縄文時代の集落・墓地と生業」関西縄文論集一、(六一書房、二〇〇三年)

- ⑤ 縄文時代文化研究会主催の「第一回研究集会縄文時代集落研究の現段階」での討論の流れ。

- ⑥ 小林謙一「縄文社会の研究の新視点——炭素一四年代測定の利用——」(六一書房、二〇〇四年)、林謙作「縄紋時代史Ⅱ」(雄山閣、考古選書、二〇〇四年)、『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ青田遺跡—新潟県埋蔵文化財調査報告書 第一三三集、二〇〇四年、谷口康浩「環状集落と縄文社会構造」(学生社、二〇〇五年)

なっていた。また、これまでに用いてきた放射性炭素年代も、せいぜい、各時期の年代的目処を述べるに留まっていた。その原因は、分析資料の量的制約や補助的年代決定手段という役割制限から、遺構や包含層から出土する炭化物や貝・獣骨が主で、測定年代の誤差も大きく、材質による年代差も顕著であったことにある。^②近年、この様な限界を克服する為に幾つかの新しい試みが行われ、集落内で同時に存在した遺構を明らかにする挑戦があった。

1 型式の細分

遺構の同時存在を証明する手段として一般的に用いられてきたのが、遺構内から出土する土器による同時証明であった。同一型式の土器が出土した遺構は同時（正確には同時期でなくてはならない）であるとした。逆に、遺構から出土した土器を、土器編年の細分おこなう際の基礎資料とした。^③最初に問題となったのは、出土した土器が、その遺構の年代を示すか、という問題であった。特に堅穴住居跡から出土する土器には、明らかに住居廃絶後にほぼ完形に近い土器が投棄されたものがあり、出土状況の詳細な検討が必要となった。現在では、堅穴住居跡の年代を決定するために用いる土器は、住居の構築や改築と直接関わる土器、床面や諸施設に密着して出土する土器を十分に検討して用いている。

しかし、そのような遺構と土器との出土共伴関係に検討を加えても、土器型式自身が持っている限界があり、同一型式に属する土器が出土した遺構（住居跡）を、同時期と言っても、正確には同時に存在したとはいえないのである。例えば、比較的土器編年の細分化が進んでいる関東地方では、中期を一般的には五領ヶ台1式→加曾利E4式までの一型式に細分する。その間の存続年数は谷口康浩によれば九七〇～一二〇年間、小林謙一によれば一〇五〇年間という。すなわち、平均すると一型式は約一〇〇年の年代幅があることになる。一般的言って、堅穴住居の存続年代は、最大に見積もっても二〇年以下と考えられ、^⑤現在の一般的な中期一型式細分では、住居跡の同時存在を証明できる時間幅にはほど遠いのである。

証明可能な最も細分の進んでいる土器編年として、奈良時代の土器編年があるが、その一様式は約二〇年であり、土器細分としては限界に近い。^⑥縄文中期土器の最も細分された土器編年に、黒尾和久、小林謙一、中山真治の研究がある。^⑦それによれば、多摩丘陵・武蔵野台地の中期土器は、一三期三一細別が可能であり、さらにこの細別は中部高地や北陸地方も射程に入れることができるという。^⑧中期の存続期間の一〇五〇年を考慮すると、この細分編年によって一細分型式当たり平均で約三四年になるが、まだ、住居の同時存在を決めうる精度には至らない。

当然、同時性の追求の為には、土器型式の更なる細分を求めなくてはならない。しかし、細分が進行すれば、それだけ地域間、集落間で、細分型式の併行関係を把握するのが難しくなり、編年網としての完成に時間がかかると考えられる。また、究極の細分ができたとしても、果たして、住居の同時存在を証明する手段になりうるのかの問題もある。土器型式の細分作業を進める中で、土器型式で住居の時期を決め、他の証明方法との併用によって同時存在を推定する研究法が必要であると言われてきた。

2 住まいの流れ

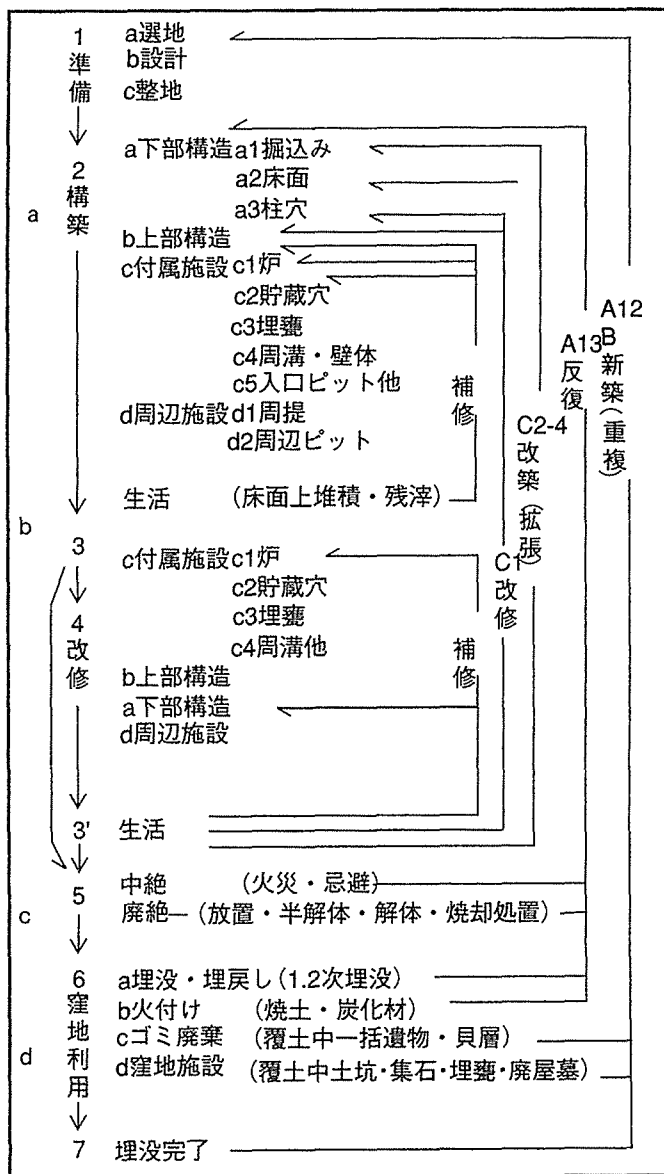
土器型式による住居跡の同時性の追求が中心であった一九六〇年代に、住居跡から出土する土器の同伴関係を怪しんだ研究者がいた。水野正好である。^⑨水野は土器型式による住居の同時存在推定を諦め、環状集落にみる住居の群構造と、各群内での住居の変遷とから、住居の同時存在を明らかにしようとした。その根拠の基本となったのは、住居跡の切り合いや炉石の移動のような住居の廃棄に関わる行為の痕跡に注目し、各群内での住まいの流れをまず把握することである。その上で、役割分担した各群が同時に存在すると仮定して、同時に存在した住居を推定したのである。当然、土器型式を無視した同時存在住居跡の選定は、厳しい批判を浴びることになったが、一方で、水野集落論とも呼ばれる、集落内の住居跡の群構造、機能と結びついた各種遺構の空間配置から集落を研究する視点は現在にまで続いている。この成功は、土器

型式の無視は問題としても、遺構自体に、同時存在を決める手がかりを求めることができることを示したと考えられる。ただし、方法的に見て水野集落論は仮説であって、証明を尽くした結論ではない。この様な仮説の提示に対する研究の進め方は、後述するように未だ十分とは言えないのが現状である。

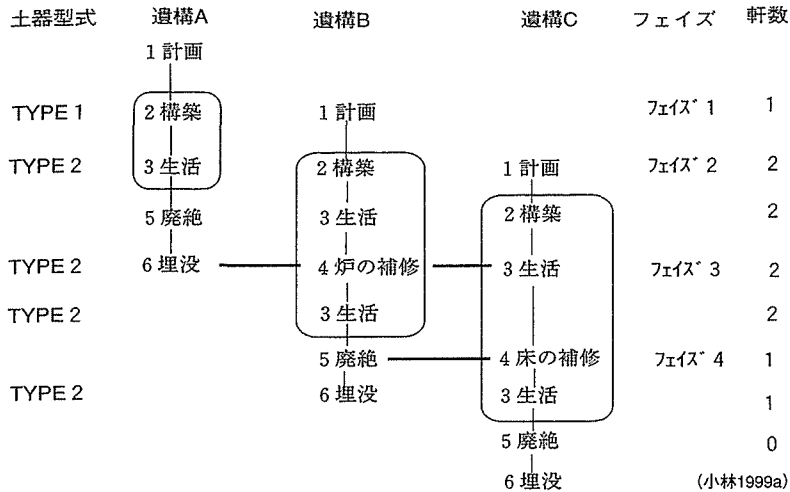
一方、「住まいの流れ」の発掘現場での追求から、住居の移動が見えるとする立場がある。末木健は、山梨県下の発掘調査で、小林達雄の言う吹上パターンで出土する土器の下にあるほとんど遺物を含まない地層（第一次堆積層）に注目した^⑩。床面直上にあるこの土層には遺物がほとんど含まれていないことから、住居廃絶後に集落が放棄された時の堆積と解釈した。さらに、この第一次堆積層が多量の竪穴住居跡に見られることから、第一次堆積土の堆積した時期にその集落での人々の活動が認められないとし、集落が頻繁に移動していた証拠であるとした。

また、石井寛は、横浜市港北ニュータウンでの発掘から、拡張され反復して使用された住居の床面と柱穴の埋積土に注目した^⑪。拡張・建直し後の床面下や旧柱穴には、自然堆積土層が流入していると判断し、拡張・建直しの度に住居使用の断絶があったとした。さらに、この様な現象が数軒にも認められることから、集落が頻繁に移動を繰り返していたとした。この様な発掘現場からの研究により、「環状集落論」では系統的な繋がりとする重複する住居跡群は、単なる窪みの利用ということになり、重複する住居間の相互の関係はないとする意見が重要視されるようになった。

小林謙一は、竪穴住居を土器型式で細分する立場を取るが、細分土器型式よりさらに短い住居の同時存在を推定する為の年代単位として、住居の計画から廃絶・埋没に到るライフサイクル（図一）^⑫と、遺構から出土した遺物の接合関係を用いて、同時に機能していた遺構群を導き出し、フェイズと命名した単位を設定している（図二）^⑬。ライフサイクルの考え方は、ユニークとは考えないが、個々の住居が持つライフサイクルの段階の違いを同時存在に持ち込んだ点は評価できる。同時存在を考えると、各遺構の存続期間を同じに考えがちであったが、そのずれを認めることで、遺物の接合関係をより同時存在の証明に用いやすくなったと思う。



図一 小林謙一による住居のライフサイクルの概念図



図二 小林謙一による集落のフェイズの概念図

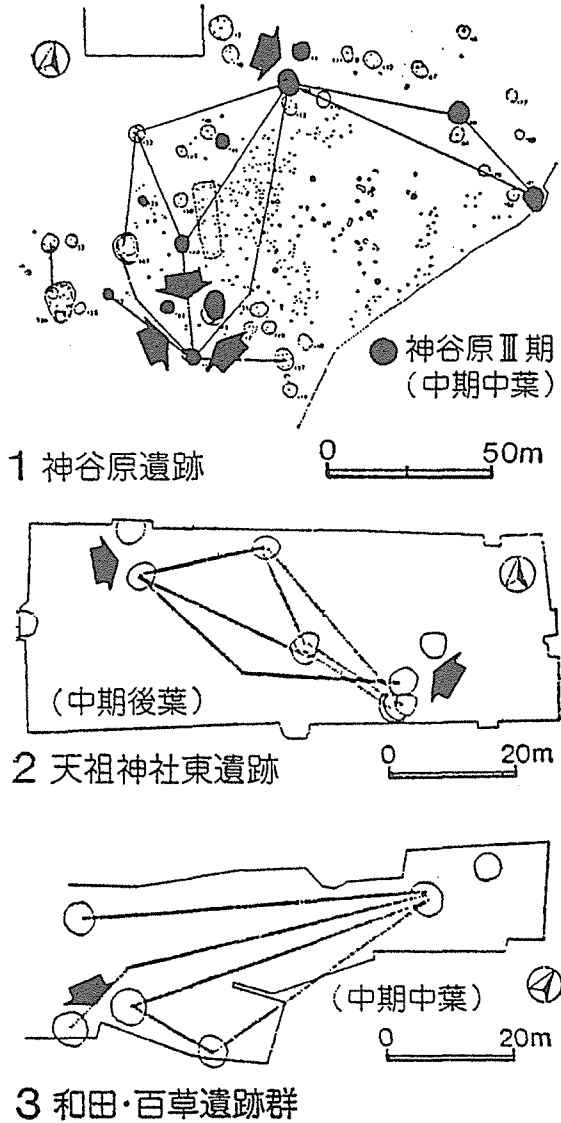
3 集落内遺構出土遺物の接合関係

発掘調査において出土遺物の三次元位置をドットして記録する方法は、古くから行われてきたし、筆者も実施してきた。筆者の場合には、遺跡の埋没状況を理解し、とくに土器型式の細分に用いる層位資料を得るためであったが、近年は遺構の時間的関係を明らかにする方法として注目されている。遺物接合関係の集落論への本格的利用としては、土井義夫と黒尾和久の研究がある。「(住居の)覆土同士で(土器が)接合する場合は、比較的距離をおいた住居間において、埋設土器と住居覆土間の接合資料は、近接住居間に見出される傾向が看取されている」とし(図三)^⑭、前者の接合関係を「環状集落の一时的景観規模を示唆する情報」、後者の接合関係を「近接住居の新旧関係の整理」を示しているとする^⑮。小林謙一は、この土器の接合関係から読み取れる遺構の時間関係をライフサイクル論と組み合わせ、遺構から住居の同時存在の推定をおこなっている。

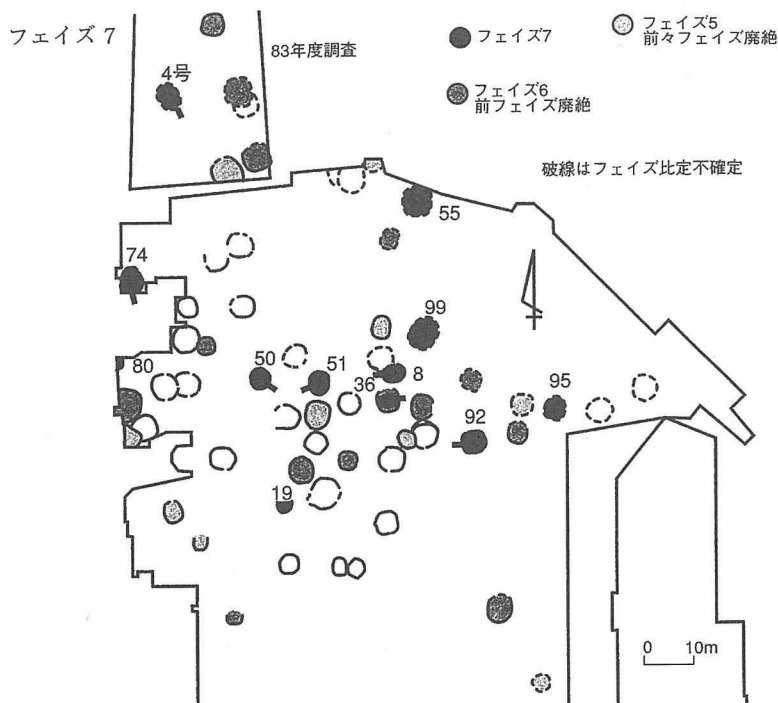
集落遺跡の発掘方法として、「ドット(点)を取る調査」を通じて遺物の接合関係を明らかにすることは当然であり、遺構の切り合い関係と同じく、遺構同士の時間関係を知る上での貴重な事実である。

4 炭素一四年代測定

暦のない縄文時代の絶対年代を知るためには、自然科学的年代測定法を用いる。幾つかある年代測定法の中で、最も一般的でそれなりの正確さがあるのが、炭素一四年代測定法である。近年、日本においてもこの炭素一四年代測定法に加速器質量分析法（以下AMS法とする）が用いられるようになり、少ない試料でより正確な年代が求められるようになった。また、炭素一四年代を暦年補正するソフトウェアが充実した。このような新しい状況下で、土器に付着した炭化物から縄



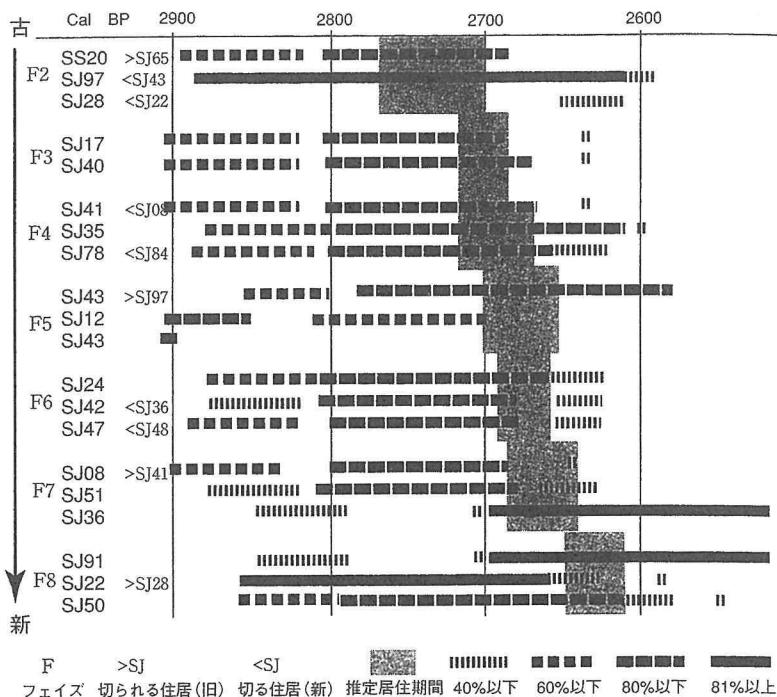
図三 黒尾和久による接合（同一個体）土器の抽出作業例



図四 小林謙一による大橋遺跡の集落フェイズ抽出作業例

文土器の使用年代を求めようとする研究が小田寛貴・山本直人らによって試みられた^⑮。この研究法を発展させ、細分土器型式の暦年代と継続時間の推定を行い、自ら考案した住居のライフサイクル論と結びつけ、集落論を展開したのが小林謙一である。^⑰

小林謙一は、炭素一四年代測定法の抱えている誤差という弱点を、考古学的に相対的な連続性が保証できる土器を系統的且つ大量に計測することにより、最小限にすることに成功した。そして、実際に、神奈川県慶義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡や東京都大橋遺跡において、住居跡から出土した土器の推定暦年代と、同じく遺構から出土した炭化物の炭素一四年代を用いて、住居跡の暦年代推定と存続時間の推定を行い、独自の集落論を展開した。この様な手続きを経ることにより、同時に存在した住居や他の遺構が識別できる結果になっている（図四・五）。この発掘調査時のデータの取り方から、分析、



図五 大橋遺跡の較正年代と推定実年代

解釈にいたる方法は、集落遺跡の調査として基本的に最も正しい方法といえるであろう。すなわち、住居跡や他の遺構の切り合い関係や、遺物の接合資料から、遺構変遷の流れを把握し、細分土器型式と炭素十四年代により、遺構の同時存在を推定する小林謙一の集落研究手法は目下の所、最も合理的なものであり、それに基づく集落論は新たな地平を切り開くポテンシャルを備えていると考えられる。

しかし、小林謙一の集落研究法の前提である遺構の同時存在と暦年代比定は、すべてが明確に証明されているとはいえない。暦年更正によって生じる誤差はともかくとして、炭素一四年代測定法に本来内包されている誤差が四〇年以上は見込まれるのに、其れより細かい年代や時間幅が推定できるのかという確率論の解釈に関する疑問が残る。また、較正年代との対比で重要な役割を演じる土器型式の相対年代にもまだ議論の余地はある様に感じる。炭素一四年代が推定外の年代を

示した資料の説明は納得できるが、再測定可能な資料については、やはり、再度測定することにより、検証可能な方法という利点をアピールして欲しいと思う。

さらに現実的な課題もある。この様な詳細で検証可能な分析が可能な資料は、現在、ほとんどないのである。今後、この様な視点を持って、集落遺跡の発掘調査は行われていくべきであるが、今までに膨大に蓄積されてきた発掘調査資料を、この新しい集落論にどう利用するかも重要な点であろう。

- ① エガース著、田中琢・佐原真訳『考古学研究入門』（岩波書店、一九八一年）
- ② 滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会『粟津湖底遺跡第3貝塚（粟津湖底遺跡Ⅰ）』、一九九七年、四一六頁。
- ③ この様な方法を用いた研究としては、住居跡から出土した完形土器を一括土器として、縄文中期の土器編年を組み立てた井戸尻編年が有名である。
- ④ 小林達雄は、堅穴住居跡の床面がやや埋積した時点で、完形の土器や土器片、他の遺物が大量に廃棄された例が多くあることに気づき、遺物廃棄の類型の一つとして「吹上パターン」と命名した（小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』九三、一九七四年、一一一四頁）。堅穴住居跡から土器が大量に出土する例は、このパターンが多く、その場合、住居の年代と、出土する土器の年代は一致しない。
- ⑤ 堅穴住居の耐用年数については多くの議論がある。堅穴住居を泥屋根の冬季住居として、毎年ないし数年で建て直しを要するとの意見もある（大塚昌彦「火山灰下の家屋」（考古学による日本歴史一五）雄山閣、一九九六年、一三七―一四五頁）。一般的に、上部構造を支える木柱の耐用年数は、古代から続く伊勢神宮の二〇年に一度の式年遷宮から推測するに、二〇年を越えることはないと考えられる。小林謙一は後に述べる東京都大橋遺跡の分析から、堅穴住居の存続年数を平均して一三年と考えている（小林謙一「縄文社会の研究の新視点」炭素一四年代測定の利用――、六一書房、二〇〇四年、一四五頁）。
- ⑥ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書Ⅱ』、一九六二年、黒尾和久、小林謙一、中山真治「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」（『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』縄文中期集落研究グループ、一九九五年、一一二頁）
- ⑦ 小林謙一「縄文社会の研究の新視点――炭素一四年代測定の利用――」（六一書房、二〇〇四年、一〇一―一四七頁）
- ⑧ 水野正好「縄文時代集落研究への基礎的操作」（『古代文化』二二―三・四、一九六九年、一一二頁）
- ⑨ 末木健「移動としての吹上パターン」（山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韭崎地内―）山梨県教育委員会、一九七五年、二二〇―二二六頁、「土器廃棄と集落研究」（『論集日本原史』、吉川弘文館一九八五年、三五一―三三七頁）
- ⑩ 石井寛「縄文時代における集団移動と地域組織」（『調査研究集録』二、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団、一九七七年、四五―五九頁）、『集落の継続と移動』（縄文文化の研究8）雄山閣出版、一九八

二年、四九—五九頁)

- ⑫ 小林謙一「縄紋時代中期集落における一時的集落景観の復元」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第八二集、一九九九年、九五—一二一頁)

- ⑬ 小林謙一「縄文社会研究の新視点——炭素一四年代測定の利用——」(『六二書房』二〇〇四年、四八—五二頁)

- ⑭ 黒尾和久「集落研究における「時」の問題」(『縄文時代集落研究の現段階』、第一回研究会発表要旨、八九—九四頁、縄文時代文化研究会、二〇〇一年)、「縄文中期の居住形態」(『歴史評論』四五四、九

—一二頁、一九八八年) 一九頁図より。

- ⑮ 図三で、丸印を結ぶ直線は丸印の遺構から出土した土器の接合関係を示す。中央にある遺構のない空間(広場)を挟んで、距離を置いて接合することが多い。一方、黒矢印で示した関係は、近接した住居間に接合関係のないことを示す。

- ⑯ 小田寛貴・山本直人「縄文土器のAMS¹⁴C年代と較正年代」(『考古学と自然科学』第四一号、二〇〇一年、一一—三頁)

- ⑰ 小林謙一「縄文社会研究の新視点——炭素一四年代測定の利用——」(『六二書房』二〇〇四年)

二 環状集落と非環状集落

考古学にとって、実証できる事実だけが研究の対象であるのか。考古資料には限界がある。現在私達ができることのできる考古資料は、当時のごく一部に過ぎない。事実、集落を構成する様々な要素・情報のうち、現在にまで残存するのはその一部に過ぎないし、また、発掘調査技術の現在の限界から、残存していても発見できないこともあるのである。

「発見できない、実証できないもの」は、集落研究に組み込む必要がない、もしくは研究の前提としないとする考えから、集落遺跡での「事実の発見」に重きを置く研究が存在する。一方、「発見できない、確認できない情報の存在を前提」に、同時存在の証明を後に回し、継続的な集落利用を前提に、集落の構造的な枠組みを見出し、集落間における構造の比較を研究の中心に据える研究もある。「見なおし論」・「横切り集落論」の立場は前者に多く、「環状集落論」は後者の立場が多い。ただし、この二つの研究の進め方が単に集落研究での後先の問題と考える研究者も多い。本章では、集落構造を重視する立場の研究を検討する。

1 環状集落の構造

関東地方、中部地方を中心に東日本の広い範囲で、縄文時代前期以降、環状を呈する大規模な集落が発見される。最大級の環状集落では、二〇〇～三〇〇棟の竪穴住居が外径一四〇メートル、内径八〇メートルの環状の範囲にあり、その内側には数百の墓穴がある。^①同時にこの数の住居や墓が存在したわけではない。何百年間にわたる利用の結果であり、同時に存在した住居や墓の数を直ちに推測するのは難しいが、規模はともかくとして、同様な構造を持つ環状集落を東日本で見出すことは難しくはない。このような環状集落を分析する手法として、同時存在遺構の追求とは別に、集落での各種遺構の空間分布を重視する方法が存在する。時間的累積結果ではあるが、環状集落には、竪穴住居跡がある空間や、掘立柱建物のある空間、墓穴が分布する空間、遺構の認められない空間などが存在する。さらに、それらの遺構の存在する所にも、重複し集中する場が複数認められる場合もある。この遺跡の状況を、繰り返して同じ場所に同じ施設を作る集落の「規制」が存在すると考える立場である。

本格的な縄文集落論の開始は和島誠一^②によるが、集落内の構造に最初に目を向けたのは、水野正好である。^③高度成長の始まりの頃、大規模な遺跡破壊を目の前にし、水野正好は、個々の遺構に目を向けがかった当時の縄文集落調査に対して、「想念を持った調査」の必要性を主張し、遺跡の背後にある「村」を読むことを集落調査の基礎におくべきとした。林謙作によれば、方法的には「水野は遺構の読み取りレベルで演繹的な論理を展開した」という。^④和島誠一と水野正好の提案した集落論は、その枠組みにおいて、集落の構造を重視して研究する縄文集落論に継続されている。

2 環状集落の重帯構造と分節構造

最近の構造に着目した集落論として、多機能で且つ最大の住居数持つ環状集落を中心に集落論をまとめた谷口康浩の研

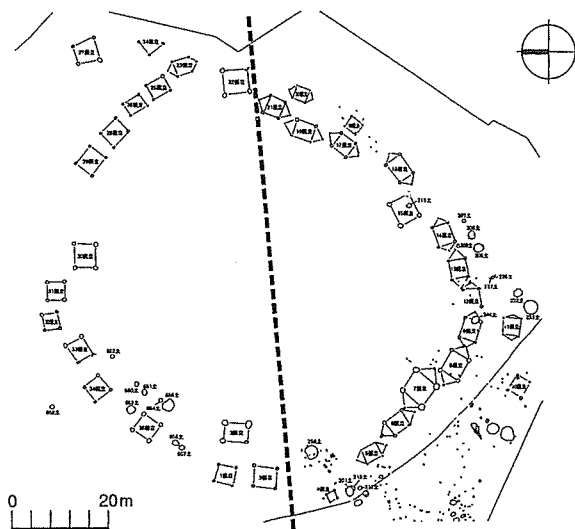
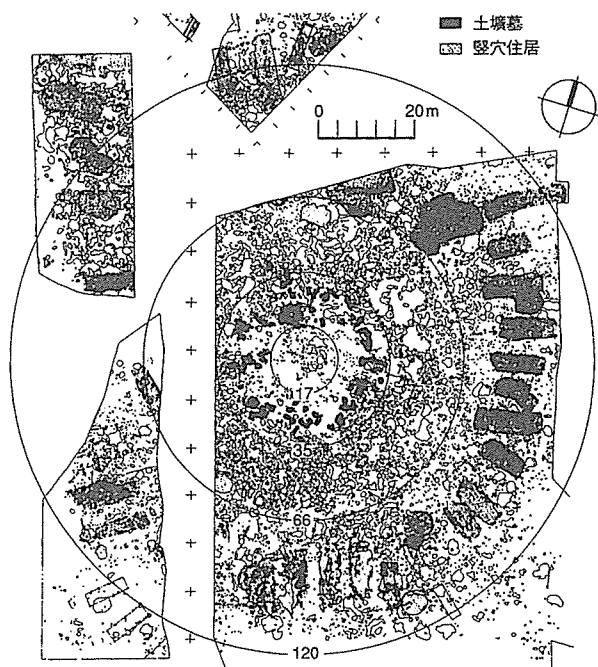
究がある。谷口康浩は環状集落の重要な二つの構造として、「重帯構造」と「分節構造」をあげる。^⑤

重帯構造とは集落空間の同心円的区分であり、「建物や施設を配置する場所に規則性があり、所定の圏内に堅穴住居・貯蔵穴・掘立柱建物・土墳墓などを配置する」構造である（図六上）。「重帯構造の基本は、集落の外周に堅穴住居を配置し、中央部分を広場および墓域とする形態である」とする。その上で、谷口康浩は中期の環状集落の重帯構造に地域差と時期差を認める。^⑥

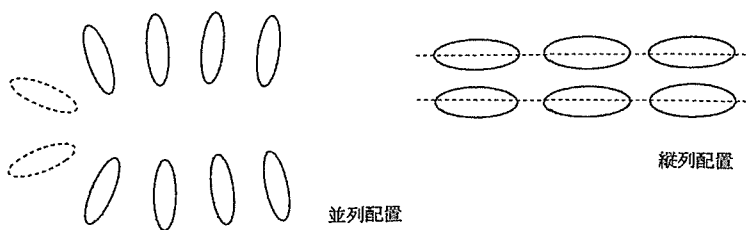
分節構造とは、集落空間の直径的区分であり、環状集落に同心円的、重圈的に存在する住居群や墓群と廃棄帯などを直径的に区分する構造を分節構造とする（図六下）。^⑦ 集落が幾つかの単位からなることは古くから注目されてきた。水野正好は、与助尾根遺跡の分析から、二大群と、各大群が二棟を一小群として三単位に別れる事を示し、集落内での集団と関わることを想定した。^⑧ 谷口康浩は、この様な環状集落一般に認められる規則的な分割はないとしながらも、中期集落内の墓群に複数認められる分節構造が、血縁集団の単位を示すと考えている。^⑨ 住居には以前から指摘されているように分節構造は認められるし、さらに、廃棄帯にもこの様な分節構造は存在する。

すなわち、環状集落における重帯構造と分節構造という「規則的な空間構成は、時間的な一断面よりもむしろ時間的な累積の中にはっきりと析出されてくる性質をもっている」^⑩と、谷口康浩は指摘する。実際に、集落の発掘調査では、時期の同定できない遺構も多くあり、先に述べた遺構の同時存在を証明する方法的な限界と合わせると、すべての遺構を時間軸だけで分類することは不可能であろう。また、集落の空間構造を追求する研究は、遺構や遺構の群構造の解釈に有利であり、集落研究の次なる目標である縄文社会の研究に向けて利点がある。

ただし、集落の構造を重視した研究は、モデルありきの「思い込み」的、仮説提示型の研究となり、自己の仮説に都合の良い例だけで「証明」する様になりやすい。古くからの水野集落論への批判の多くは、この点にあったことを忘れてはならないであろう。



図六 谷口康浩による重帯構造（上）と分帯構造（下）の例示



図七 小林克・小島朋夏による列状配置の模式図

谷口康浩の論の展開を見るに、時間的累積の結果から見る集落の構造は、一つの仮説として魅力的であるが、仮説から解釈へと直接的に展開する方法に問題はないだろうか。解釈に至る前に、時間的累積の結果から得た集落の構造が、細分された時間、同時存在の集落においても認められること、それが時間的に継続することを、具体的に実証する必要があると考える。同時存在を実証しようとする方向性が谷口康浩の著作に認められないのは、研究の展開において欠点である。

3 非環状集落の構造

先述したように、環状集落が認められるのは、年代的にも地域的にも限られている。縄文草創期から早期には、全国的に見ても環状集落は存在しないし、また、北海道東部や西日本では全時期を通じて、ほとんど環状集落は存在しない。また、東北地方では前期から中期にかけて、列状集落と呼ぶ住居が列状に並ぶ集落がある。三内丸山遺跡はその典型であり、住居に限らず、墓も道に沿って列状をなす。平面が長楕円形をなす「ロング・ハウス」の配置により、長楕円形の長軸を列状の連ねる「縦列配置」と、短軸を列状に連ねる「並列配置」に分かれる(図七)^⑩。縦列配置は前期の青森県、秋田県北部、岩手県の太平洋側にかけて分布し、並列配置は秋田県、岩手県南部から栃木県、新潟県にかけての中期の集落遺跡に多く見られる。この分布圏は縦列配列が円筒下層式、並列配置が大木式の分布圏と重なるという^⑪。また、三内丸山遺跡例のように、住居や墓、貯蔵穴が複数の群に分かれてまとまることがあり、環状集落に見る分節構造が、別の形で存在していることを推測させる。

九州地方でも、列状をなしそうな例が熊本県中堂遺跡で発見されている。円形住居が六三棟検出され、あたかも道に沿って二列に住居が配されていたような景観であった。前迫亮一、水ノ江和同によれば、「おおよそ四群に分かれる住居群が四段階に亘って変遷していく様子が窺える」という。^⑩

縄文集落の発掘調査が西日本では最も進んでいる九州地方では、数十棟以上の竪穴住居からなる集落遺跡が十カ所以上で発掘されている。一一三棟の竪穴住居が出土した宮崎県本野原遺跡のやや変形した環状集落には、墓域や広場の重帯構造があり、掘立柱建物も検出されており、東日本的環状集落の可能性が指摘できる以外は、基本的に重帯構造のある環状集落は見られない。しかし、それなりの規模の集落遺跡では、竪穴住居群が二群ないしそれ以上に群分けできる例は一般的であり、^⑪分節的な構造が存在していたと想像することはできる。

環状集落のほとんど見られない地域は、日本列島に広くある。それらの地域において環状集落が見られない理由として、環状集落を形成するほどの大規模な集落が形成されなかったと考えるか、大規模集落も環状集落とは異なる集落構成の原理と形態で形成されていたと考えるか、集落構成の原理は同じでも形態だけが違うのかを見極めるのは、未だ資料不足と議論不足である。

4 掘立柱建物で構成された集落と掘立柱木柱の年輪年代

一九九九年からはじまった新潟県青田遺跡の発掘調査では、掘立柱建物で構成された縄文晩期終末期の集落が発見された。四二五本の木柱が腐敗せずに遺存しており、その配置から五八棟の掘立柱建物が識別された。^⑫新潟県下では、縄文後期から掘立柱建物が竪穴住居と共存しながらも、増加するようになり、晩期後半には掘立柱建物だけで構成される集落が登場した。^⑬青田遺跡もその内の一つである。新潟県以南の北陸地方では、環状木柱列のような強大な木製祭祀遺構は発見されるが、竪穴住居跡は発見されておらず、筆者は掘立柱の住居が分布していた可能性が高いと考える。さらに、近畿地

表一 木村勝彦による青田遺跡グループ1の構成個体の年輪パターン間の相関表

	SB5 P879	SB5 P880	SB5 P884	SB5 P885	SB5 P917	SB5 P922	SB27 P2386	SB27 P2389	SB32 P1948	SB32 P2226	SB32 P2439	SB37 P852	SB37 P1853	SB37 P1854	SB37 P1855	SB38 P1892	SB38 P2523	SB39 P1851	SB39 P1908	SB39 P1910	SB40 P20	SB40 P790	SB40 P1856	SB40 P1857	SB40 P2109	SB43 P1897	SB43 P1896
SB5 P879	-	5.30	6.56	7.56	12.44	6.00	1.91	1.89	7.70	0.74	1.73	1.49	5.97	1.76	3.25	3.02	2.10	3.26	2.46	3.11	2.97	3.08	2.06	3.95	3.24	2.48	0.78
SB5 P880	49	-	3.05	3.61	5.35	6.87	0.61	2.27	3.95	-0.93	0.73	2.03	1.91	2.03	7.37	2.38	2.09	4.50	2.11	2.71	1.83	0.45	2.27	2.27	1.07	1.67	0.09
SB5 P884	49	49	-	6.22	8.19	6.05	2.63	1.13	3.50	0.24	2.37	1.31	3.71	3.26	1.03	3.18	0.75	2.89	2.29	2.22	0.49	2.71	2.38	4.43	2.57	0.95	1.59
SB5 P885	48	48	55	-	9.48	4.43	3.76	2.79	5.62	-0.47	1.12	2.26	3.99	3.16	0.83	4.08	2.22	3.33	2.58	2.65	2.39	3.54	2.82	6.16	3.79	2.76	0.64
SB5 P917	46	46	46	45	-	6.62	1.43	1.53	7.57	0.16	0.56	1.77	4.20	0.94	2.85	3.47	1.58	4.05	2.67	2.28	1.64	2.43	1.42	3.68	2.81	2.74	-0.22
SB5 P922	45	45	45	44	45	-	0.13	1.11	4.39	-1.09	0.33	1.50	1.87	1.12	6.07	2.52	1.61	4.44	2.03	3.09	0.62	0.48	1.75	1.56	2.24	1.30	-0.52
SB27 P2386*	45	45	62	52	42	41	-	6.93	3.51	1.86	1.88	3.10	5.81	1.60	0.40	3.23	3.25	-0.08	0.81	2.43	1.73	1.60	1.62	5.15	2.28	1.70	2.39
SB27 P2389*	45	45	66	52	42	41	62	-	3.07	2.94	1.43	1.44	4.18	1.74	2.36	3.92	2.71	0.73	0.81	4.10	2.08	2.55	2.44	3.79	3.08	2.47	1.57
SB32 P1948	50	49	75	55	46	45	62	66	-	2.61	3.01	5.37	4.99	5.11	2.58	4.26	2.65	2.71	2.89	2.17	2.18	5.23	4.02	5.82	3.44	4.93	2.00
SB32 P2226	50	49	60	55	46	45	56	56	61	-	0.55	-0.01	2.12	0.96	0.80	0.59	0.61	-1.08	0.18	0.08	0.66	2.94	0.89	1.21	2.34	1.80	0.27
SB32 P2439*	50	49	66	55	46	45	62	62	67	61	-	1.86	1.82	2.06	1.13	-0.47	0.38	-1.08	-0.65	0.35	2.48	1.21	1.60	1.43	0.78	0.93	2.74
SB37 P852	50	49	76	55	46	45	62	66	76	61	67	-	2.67	4.56	0.98	3.01	2.29	1.14	2.60	1.29	1.34	0.79	1.81	3.67	1.86	2.81	2.30
SB37 P1853	31	31	31	30	31	31	27	27	31	31	31	31	-	1.33	3.18	4.23	5.16	1.40	3.22	2.49	3.85	4.31	1.36	6.05	3.86	2.51	3.15
SB37 P1854	50	49	65	55	46	45	61	61	66	61	66	66	31	-	1.62	3.84	0.83	0.89	1.39	1.63	3.12	4.40	4.51	3.21	3.58	5.34	2.13
SB37 P1855	33	33	33	32	33	33	29	29	33	33	33	33	31	33	-	3.04	3.29	2.38	2.52	1.51	2.22	0.56	2.64	1.59	1.39	1.19	0.51
SB38 P1892	48	48	69	55	45	44	62	66	69	59	65	69	30	64	32	-	5.40	4.63	5.14	2.43	2.88	1.81	2.01	5.99	3.54	6.79	1.78
SB38 P2523	48	48	75	55	45	44	62	66	74	59	65	75	30	64	32	69	-	3.03	2.87	3.82	2.63	1.13	1.24	3.63	2.00	3.38	2.10
SB39 P1851	47	47	54	64	44	43	52	52	54	64	54	54	29	54	31	54	54	-	3.74	3.96	1.66	1.03	1.33	3.72	1.83	2.19	0.02
SB39 P1908	47	47	71	54	44	43	62	66	71	58	64	71	29	63	31	68	71	54	-	2.93	1.65	3.04	2.83	3.31	1.95	2.83	1.26
SB39 P1910*	39	39	39	39	39	39	37	37	39	39	39	39	29	39	31	39	39	39	39	-	1.95	1.91	1.35	2.05	1.21	0.69	2.74
SB40 P20	45	45	47	47	42	41	47	47	47	47	47	47	27	47	29	47	47	47	47	37	-	3.71	2.21	3.26	3.27	3.32	1.31
SB40 P790	45	45	49	49	42	41	49	49	49	49	49	49	27	49	29	49	49	49	49	37	47	-	3.57	4.77	6.07	3.63	1.20
SB40 P1856	45	45	59	52	42	41	59	59	59	56	59	59	27	59	29	59	59	52	59	37	47	49	-	2.11	2.07	1.29	2.82
SB40 P1857	45	45	68	52	42	41	62	66	68	56	62	68	27	61	29	68	68	52	68	37	47	49	59	-	6.25	4.86	1.70
SB40 P2109	45	45	52	52	42	41	52	52	52	52	52	52	27	52	29	52	52	52	52	37	47	49	52	52	-	4.39	-0.79
SB43 P1897	48	48	78	55	45	44	62	66	74	59	65	75	30	64	32	69	75	54	71	39	47	49	59	68	52	-	1.57
SB43 P1896	48	48	99	55	45	44	62	66	74	59	65	75	30	64	32	69	75	54	71	39	47	49	59	68	52	78	-

* クラス節

対角線の右上がt値、左下は重なる年数を、四角で囲まれた部分は同じ建物内の組み合わせを示す。(太字: t値が3.5以上)

方以西の後期では、竪穴住居の発見例が少なく、遺跡から多くの柱穴遺構が発見されることが多いことから、掘立柱による住居があったのではないかと推測している。

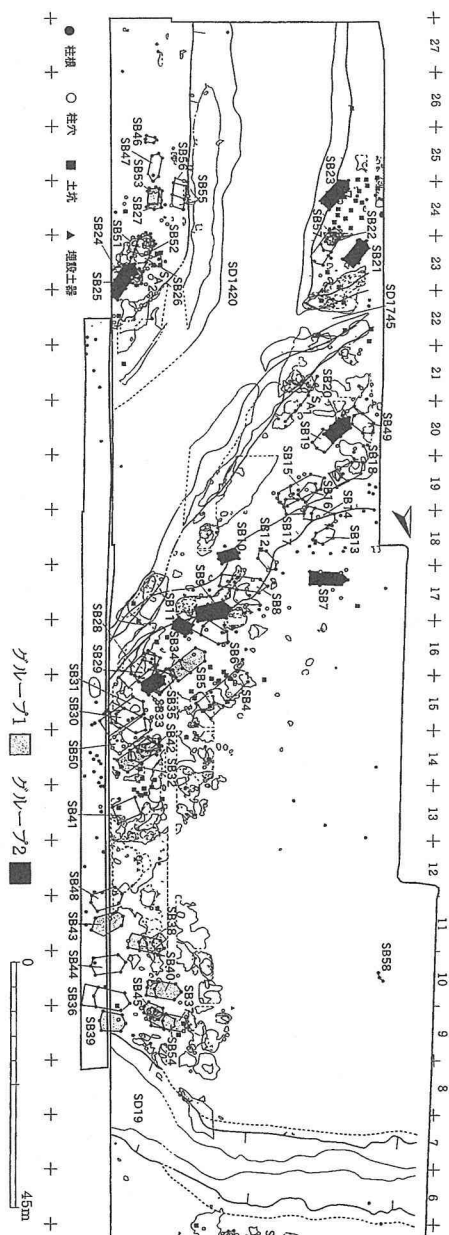
青田遺跡発掘調査の最大の成果は、先に述べた木柱の残存していた掘立柱建物の年代を正確に決定できた点である。竪穴住居の同時存在の証明は大変難しく、大変ややこしい証明手続きが必要であったが、青田遺跡では掘立柱建物に使用されたクリやコナラ属の木柱の年輪比較から、建物間の年代差が明らかになった。^⑮同様の方法はスイスにおいて青銅器時代の村の展開について用いられた例があるが、日本では初めてであった。

表二 木村勝彦による青田遺跡グループ2の構成団体の年輪パターン間の相関表

	SB7	SB9	SB9	SB9	SB10	SB11	SB11	SB11	SB20	SB21	SB24	SB21	SB23	SB23	SB23	SB24	SB34	SB34
	P1402	P930	P972	P1438	P936	P904	P931	P1461	P1662	P1721	P1725	P1740	P1743	P1831	P1832	P1833	P2046	P2010
SB7 P1402	-	1.52	3.32	1.56	1.15	0.95	2.54	0.99	2.09	2.58	3.30	3.93	1.29	3.50	2.17	1.74	-0.01	1.70
SB9 P930*	51	-	3.93	4.13	2.92	3.51	4.60	3.91	3.77	4.10	0.70	2.77	4.57	5.07	4.91	3.35	1.89	4.78
SB9 P972	39	-	-	4.43	5.10	2.08	1.41	4.05	2.86	2.84	1.60	7.02	3.83	9.25	5.00	2.35	3.82	2.55
SB9 P1438	42	42	39	-	4.57	1.91	1.77	8.22	3.34	3.03	0.54	2.83	5.04	5.02	5.01	2.25	3.23	4.77
SB10 P986	32	32	32	32	-	2.29	1.43	3.32	4.40	2.39	-0.61	3.22	1.88	4.28	6.48	5.51	5.47	4.54
SB11 P904	51	54	39	42	33	-	2.61	1.06	3.20	3.21	2.54	4.16	4.16	2.06	6.28	4.34	3.40	3.75
SB11 P931	51	65	39	42	33	55	-	1.25	2.65	1.83	1.43	1.63	1.12	1.70	3.43	1.56	1.27	3.18
SB11 P1461	37	37	37	37	33	38	38	-	2.51	1.48	-0.81	2.58	3.12	3.82	2.53	1.70	3.13	3.00
SB20 P1662*	45	45	39	42	32	45	45	37	-	3.54	1.43	1.83	2.51	3.24	2.83	2.29	2.80	2.74
SB21 P1721	50	61	38	41	31	53	61	36	44	-	3.89	3.41	7.29	3.02	6.89	4.77	2.23	4.98
SB21 P1725	49	66	37	40	30	52	63	35	43	60	-	1.72	1.68	1.50	2.14	2.76	0.76	2.89
SB21 P1740	38	38	38	38	33	39	39	38	38	37	36	-	3.90	6.86	6.03	3.07	3.89	3.55
SB21 P1743	50	51	38	41	31	51	51	36	44	51	50	37	-	3.26	5.21	3.93	2.26	4.14
SB23 P1831	40	40	39	40	32	40	40	40	39	38	38	38	39	-	4.96	2.46	2.62	4.97
SB23 P1832	51	65	39	42	33	55	66	38	45	61	63	39	51	40	-	5.19	5.22	6.20
SB23 P1833	50	50	39	42	33	51	51	38	45	49	48	39	49	40	51	-	1.83	5.71
SB24 P2046	47	47	39	42	33	48	48	38	45	46	45	39	46	40	48	48	-	2.16
SB24 P2010	48	64	36	39	29	51	62	34	42	59	64	35	49	37	62	47	44	-
SB24 P25	49	57	37	40	30	52	57	35	43	57	57	36	50	38	57	48	45	-

*コナラ類

対角線の右上が値、左下は重なりの方角を、四角で囲まれた部分は同じ建物内の組み合わせを示す。（太字：値が3.5以上）



図八 木村勝彦による同時存在建物群の抽出作業例

年輪年代法における年代測定の詳細は割愛するが、彼らは一三本の木柱について分析を行っている。まず同一建物を構成する柱材で年代関係の検討している。この結果、同一建物内での柱材はほぼ同一年に伐採されたことがわかったという。その上で、建物間の年代比較を行っている。分析を行った建物は二群に分かれ、それぞれの群の中では、建物の短期間に建築されたことが判明した。年輪から分けた建物の二群は、発掘調査で層位的に分かれたS4～S3期、S1期にそれぞれ対応するという。

具体的に紹介すると、グループ1とする群は八棟二七柱根からなり、始めに二棟、二年目に一棟、三年目に二棟、四年目に一棟、五年目に二棟が建設されたとする。グループ2は一〇棟二〇柱根からなり、柱根が少なく建物の建築順序は明らかにしえないが、五年程度の短い期間に建てられたとする(表一・二)。

建物の存続期間が五年以上とするならば、青田遺跡において証明可能な同時に存在した建物は、少なくとも八―一〇棟となる（図八）。年代同定ができなかった掘立柱建物や、未発掘地域にある建物を加えれば、少なくとも、同時に一〇棟以上の住居が建っていたと推定できるという。^⑭

年輪年代を利用して同時存在の住居を明らかにする手法の日本での応用は、貴重な成果であり、今後の集落研究において、重要な役割を演じる事は間違いない。しかし、青田遺跡のように木柱が遺存する遺跡は極めて希であり、この方法だけでは、縄文集落を明らかにすることはできない。まず、これだけ詳細な住居の変遷を辿ることのできる集落を、どのように分析するか考古学的な取り組みが必要である。

- ① 谷口康浩『環状集落と縄文社会構造』（学生社、二〇〇五年、五四―五八頁）
- ② 和島誠一「原始聚落の構造」（『日本歴史講座』学生書房、一九四八年、一―三三頁）、「南堀貝塚と原始集落」（『横浜市史』一、有隣堂、一九五八年、二九―四六頁）。
- ③ 水野正好「縄文時代集落研究への基礎的操作用」（『古代文化』二二―三・四、一一―二頁、一九六九年）
- ④ 林謙作「縄紋時代史Ⅱ」（雄山閣、考古学選書、二〇〇四年、〇〇頁）
- ⑤ 谷口康浩「環状集落の空間構成」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、六一―七二頁）。水野正好はすでにこの様な同心円構造と群構造に注目していたが、同心円構造の地域差を認めるなど谷口康浩独自の展開があり、重帯構造と分節構造という谷口康浩の用語に従う。
- ⑥ 谷口康浩「環状集落の空間構成」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、六一―七二頁）の六六頁。
- ⑦ 谷口康浩「環状集落形成論―縄文時代中期集落の分析を中心として―」（『古代文化』五〇（四）、一九九八年、一一―一八頁）
- ⑧ 坪井清足「縄文文化論」（『岩波講座 日本歴史』一、一九六二年、一〇九―一三八頁）に引用。
- ⑨ 谷口康浩『環状集落と縄文社会構造』（学生社、二〇〇五年、八・九頁）
- ⑩ 谷口康浩「環状集落の空間構成」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、六一―七二頁）六二頁。
- ⑪ 小林克、小島朋夏「非環状集落」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、七三―七七頁）
- ⑫ 小林克、小島朋夏「非環状集落」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、七三―七七頁）七四頁。
- ⑬ 前迫亮一、水ノ江和同「九州地方南部における縄文時代集落の諸様相」（『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、六〇五―六〇九頁）
- ⑭ 水ノ江和同「九州地方における集落変遷の画期と研究の現状」（『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会、二〇〇一年、四七―五〇頁）

- ⑮ 新潟県教育委員会、財団法人新潟県埋葬文化財調査事業団「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ青田遺跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書 第一三三集、二〇〇四年)

- ⑯ 荒川隆史「新潟県における縄文晩期のムラ・墓・建物」(『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」川辺の縄文集落」、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団、新潟県教育委員会、二〇〇二年、九二―九七頁)

- ⑰ 関西縄文文化研究会「関西の縄文住居」、一九九九年

- ⑱ 木村勝彦、斉藤智治、中村俊夫「青田遺跡における柱根の年輪年代学的解析による建物群の年代関係の検討」(『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第一

おわりに

本論で取り上げた最近の論文・報告書は、「見なおし論」と「環状集落論」という従来の分類ではなく、異なる幾つかの軸で、分類できるかもしれない。一つに、縄文時代観と深く関わる、「小規模集落論」と「大規模集落論」という区分。一つに、「頻繁な移動がある」とするか、「頻繁な移動はない」とするか。また、手法と係わる「実証的手法Ⅱ同時的存在の追求」と「演繹的手法」という区別も可能である。例えば、小林謙一の集落論は、「実証的手法」による非「大規模集落論」で、「頻繁な移動も時期的にはあった」とする集落論である。谷口康浩の集落論は「演繹的手法による」「大規模(環状)集落論」「頻繁な移動は認められない」とする集落論にあたると考える。この大きな違いは、やはり最終的には考古学的手法、すなわち、遺跡の中で、発掘調査の中で実証されるべきであろう。

小林謙一のAMS法による炭素一四年代測定法を利用した同時存在住居の追求、木村勝彦の年輪年代による同時存在住居の追求は、今までは思うようには証明できなかった同時存在の遺構群による集落復元を可能にした。この様に遺跡の詳細な分析が可能になると、地域や時期や規模等により、環状集落でない様々な形態の集落も見え、集落分析も進行する気

二三集、二〇〇四年、一六五―一七六頁)

- ⑲ RENFREW, C. and BAHN, P., *Archaeology: Theories, Methods and Practice*, Second Edition, London, 1996, p. 130.

- ⑳ 木村勝彦「木柱の年輪から読む縄文人のくらし」(「木が語る縄文ライフ——青田遺跡の最新成果から——」新潟県立博物館、信濃川火焰街道連携協議会、二〇〇五年、一六頁―二二頁)

- ㉑ 木村勝彦「木柱の年輪から読む縄文人のくらし」(「木が語る縄文ライフ——青田遺跡の最新成果から——」新潟県立博物館、信濃川火焰街道連携協議会、二〇〇五年、一六頁―二二頁)

がする。環状集落や竪穴住居のあまり見られない地域での集落についても、より積極的な研究も進むと考える。環状集落の発見されていない近畿地方にいる筆者にとって、集落論がより身近な議論になりそうである。

① 東京都大橋遺跡では加曾利E₂式と加曾利E₄式には断続的な居住
が想定できるとしている。小林謙一『縄文社会の研究の新視点——炭素
一四年代測定の利用——』、六一書房、二〇〇四年、一六四頁

Issues in the Study of Settlements of the Jomon Period

by

IZUMI Takura

In the analysis of Jomon settlements 縄文集落, there are two conflicting views. One view holds that Jomon settlements were not as extensive as current archaeological sites suggest and that the settlements were temporary sites resettled over and over again. The other view holds that extensive sites are the result of accumulation in the sites over hundreds of years and the large-scale settlements were equipped with facilities necessary for sedentary life. The former is called the “revisionist (or synchronous) theory” since it was derived from the stand point of those in charge of excavations who sought how to consider what had once been seen as contemporaneous dwellings and graves. The latter is known as the “circular settlement theory” because it posits a theory of settlements based on an analysis of the special circular structure of the Jomon settlements that provided evidence of such by their concentric circular form.

The greatest source of the conflict between the two theories is the fact that it cannot be made entirely clear that the remains of the many dwellings, graves, and storage pits were contemporaneous. For example, even though the remains of hundreds of pit dwellings have been discovered on the sites, it is not possible with current research methods to determine immediately how many structures existed at one time and thus how they were distributed within the settlement.

In the context of this debate, archaeologists representing both the “revisionist theory” and the “circular settlement theory” convened a scholarly conference on Jomon settlements in 2001. The existence of the problem began increasingly apparent.

A new investigative research methodology that could prove synchrony of Jomon dwellings was revealed in 2004. One of these was *Aota site Excavation Report*, which made clear the existence of a group of eight structures that had been erected one after another in the space of five years, and of another group of ten structures likewise erected within five years of one another on the basis of dendro-chronological examination of the posts that formed the upright post-standing buildings of the final Jomon period. In addition, the examination of settlements in KOBAYASHI Ken'ichi's *New Perspective of Study on Jomon Society: Ap-*

plied Radiocarbon Dating to Archaeological Methodology attempted to confirm whether dwellings were of the same period by examining their temporal relationship that had been obtained through archaeological methods more concretely by the application of high-precision radiocarbon dating by the AMS (Accelerator Mass Spectrometry) method. Both works transcended the lingering and troublesome issue of verification and have been highly regarded as taking a first step toward a theory of settlements based on facts that could be verified.

Furthermore, in 2005 TANIGUCHI Koji published *Circular Settlements and the Structure of Jomon Society*, which systemically argued the circular settlement theory. The day when the empirical and structuralist theories of settlement scholarship can be argued on an equal footing is fast approaching.

The Possibilities and Limitations of the Research on *Ernian lüling* :
Recent Research on the Wendi Reign Utilizing
the Newly Excavated Bamboo Manuscripts

by

MIYAKE Kiyoshi

Since the publication of the Zhangjiashan bamboo manuscripts in 2001, numerous studies on this new material, especially of *Ernian lüling* (Statutes and ordinances in the second year), have been made. The excavated code, dated to the beginning of the Han dynasty, has given us a lot of information on Han institutions, and cast new light on our understanding of political history. The author takes up the political problems in the Wendi reign (BC 180-BC 157), analyzes prior studies on this matter, and attains a new stand point from which to reassess the institutional reformation made by Wendi. In addition, a discussion of the characteristics of *Ernian lüling* as excavated material is one of the aims of this paper.

The most urgent problem facing the Wendi reign was to develop counter-measures against the marquises. In order to reduce their threat, Wendi subdivided their fiefs, Jingdi later reduced them, and Wudi eventually realized direct control over the whole empire. This process gives us the impression that the elimination of marquises was also the goal of Wendi's policy. The broad discretion given to marquises, and the strict limitation on horse exports to marquises, both of which we can see in *Ernian lüling*, seem to support this impression. However, the